

女子大学生における死の意識に関する調査

A study on consciousness about the death in female university students

増 田 公 男

Kimio Masuda

【序 論】

わが国では、1998年以降続いている年間3万人を超える自殺者、また、65歳以上の人口が20%を超えるという人口構成の高齢化やそれともなう介護などといった問題を背景として、人びとは生や死を意識せざるを得ない状況にあるといえよう。誰もがいつかは死と対峙しなければならない。死は本人にとってだけでなく、家族や友人など周囲のものにとっては、乗り越えなければならない人生の重要なライフイベントのひとつである。

我々がもっとも身近に死を意識するのは、重要な他者、すなわち家族や親しい友人など日頃から親密にしている人の死であろう。死別経験という喪失経験によって、PTSD（心的外傷後ストレス障害）がもたらされる場合もある（佐藤、1998など）。死別経験により生じた心理的、身体的な問題を適切に乗り越えるできない場合は、日常生活のなかに慢性的にストレスを抱えることになる。こうした点から人生のライフイベントのなかで、死別経験は否定的な側面が強調され、心理

学的なアプローチでは、以前はそれにより生じた心理的・身体的な不調や悲嘆から回復までが中心であった。

近年、大竹（2009）などでWell-beingへのアプローチのなかでも指摘されているように、20世紀までのネガティブ心理学から21世紀のポジティブ心理学への流れとも符合するように、1990年代後半から死別経験によるその克服過程から生じるポジティブな面への関心が高まってきている。欧米では、20世紀の末にすでにより積極的な変化についての研究が始まっていた。本邦では21世紀に入って、こうした研究が多く発表されるようになり、ポジティブな変化について、東村ら（2001）はライフスタイルの変化、死への態度の変化、人間関係の再認識、生への感謝、自己の成長、人生哲学の獲得、宗教観の変化の7点を、坂口（2002）はいのちの再認識、自己の成長および人間関係の再認識の3点をあげている。後者の3点はほぼ前者に包含されており、後者が基本的なポジティブ変化とみなすことも可能かも知れない。

渡邊（2005）は、人との死別経験者には人格的な発達が見られ、さらに、死別経験者の（最も印象に残った死別対象への）ケア体験の高低と人格発達の関係を見だし、ケア体験の多いものの方が人格的発達が高くなっていた。身近な者の死、とりわけ両親について

は、特別の影響が懸念されるが、ケア体験を含め遺族には人格発達に対する積極的意味を見いだすことができる。

親密な他者との死別経験は、児童・青年期の子どもたちには、特に大きな心理的なストレスを与える可能性がある。悲哀過程としてもっともよく知られているのは、Kubler-Ross (2001) の5段階説(否認-怒り-取り引き-抑鬱-受容)である。最後の段階である「受容」は重要な他者の死を受け入れるのであって、乗り越えることを通して次の段階へ進むという、成長の段階にまで踏み込んではいない。また、死別経験によって生じるストレス経験等への対応、すなわち悲哀によって生じる Worden (1991) による感情鈍麻の期間、思慕の位相、混乱と絶望の位相、再構成された行動の位相という4つの位相に表されるように、回復までに焦点が当てられていた。つまり、死別経験からその経験をもとに立ち直り、歩み始めるところまでであった。重要な他者との死別はもとより、子ども時代には自らが飼育している動物との死別も、「死」を身近に感じるきっかけとなり、それによる悲哀から立ち直ることに困難がともなう場合も少なくない。

人との死別経験のみならず、子ども時代には世話をしている動物の死(ペットロス)に直面することにより、死に対する認識が深まり悲嘆などの情緒的な体験をすることになる。ペットロスによる影響は、ペットロス症状といわれる悲観、集中できない、消化器症状、頭痛など心身の問題(木村, 2009など)が現れるという。他方、認知的には幼児期での調査では、経験者は通常、児童期にならないと理解できないとされている非可逆性の理解が高いことが示されている(濱野, 2008)。

親密な他者との死別経験は、児童・青年期

の子どもたちには、特に大きな心理的なストレスをもたらす可能性がある。本研究は、今後死別経験にともなう身近な者へのケアなどを通して、人格発達への積極的な意義を見いだすための研究を実施するに当たっての基礎的資料を収集するために計画された。本研究では質問紙による調査法を用い、後期青年期女子が死に関してどのような意識を持ち、発達段階別にどのような死別経験をもつのかを明らかにするとともに、身近な人や飼育していた動物との死別経験に死への意識が異なるのではないかとの仮説に基づき、検討することをおもな目的とした。

【方 法】

1) 調査年月および協力者

本質問紙調査は、2009年7月に女子大学生1, 2年生に対して実施し、196名から回答を得た。今回の分析対象は、一部未記入者を除いた191名であった。なお、平均年齢は18.7歳(SD=0.66)であった。

2) 質問紙と分析

本調査で使用した質問紙への回答は、無記名式で実施した。質問紙は、25項目(各4件法)からなる「死に関する意識」についての質問(田中ら, 2002; 付表)を中心に、属性の他、居住状況、死についての意識の経験の有無などの評定法など選択式による回答と自由記述による回答に分かれていた。死の意識の経験は、その発達段階と内容、身近な人や可愛がっていた動物との死別経験、死のイメージなどの記入を求めた。なお、今回の統計的分析は、おもに「死に関する意識」について行った。分析は、因子分析や2者間のt検定を中心に行い、今回の場合、死を考えた経験や死別経験が、従属変数である死の意識全般に影響すると予測し、片側検定で統計分析を実施した。

【結果と考察】

1) 質問項目ごとの平均値

今回用いた「死に関する意識」の25質問項目の平均値とSDは、付表に示した。中間値の2.5を上回った項目が12項目、下回った項目が13項目になっていた。「大切な人の死の不安」が他と0.4以上の差が比べて最も高く、青年期を対象としたこともあり、自らの死より父母や祖父母といった年長の身近な人への思いの反映の可能性がある。「死に直面しても動揺しない（※逆転項目）」、「死を考えると時間の無駄（※）」が続いた。反対に低得点の

項目は、「悪夢のような苦しみ」、「他の人より不安」、「寝る前に考える」となっていた。

2) 死を意識した経験と死別経験

「死」について考えたことがある（以下、「死」を意識）と答えたものは、74.9%に達した。本結果は他の調査と比較して高くなく、例えば、倉田（2008）の女子大学生の結果より10%程度低かった（「深く考えたことがある」と「考えたことがある」を合計した数値；85.1%）。ただ、そこでの対象は本対象より約2歳ほど年齢が高く、約半数の49.3%が看護学科の学生だったことを勘案す

表1 「死に関する意識」の質問項目の因子分析の結果および t 検定の結果の要約

項目順	質問項目の要約（注）	逆転項目	因子1	因子2	共通性	死を意識	人との死別経験	動物との死別経験
7	死を空想する		0.809	0.070	0.660	有>無 *		
1	考えること		0.735	0.150	0.562	有>無 ***		
2	若死を考える		0.717	0.073	0.520	有>無 ***		
3	死を寝る前に考える		0.642	0.188	0.447	有>無 *		有>無 +
22	交通事故で死ぬ		0.576	0.022	0.332	有>無 *		
5	死んだときの身内		0.572	0.058	0.330			有>無 *
6	病気の時に死を考える		0.560	0.196	0.352			
21	大切な人の死		0.558	0.132	0.329	有>無 *	無>有 *	有>無 +
11	死を考えると不安になる		0.017	0.804	0.647	有>無 *		
15	死ぬことが恐ろしい		-0.114	0.790	0.637			有>無 +
20	死を考えると憂鬱になる		-0.012	0.776	0.602	有>無 *		
16	人生の短さに動揺		0.030	0.749	0.562	有>無 **		
9	他の人より死が不安		0.421	0.491	0.418	有>無 **		有>無 *
14	死は悪夢のような苦しみ		0.091	0.639	0.417	有>無 *		
4	死期により振る舞いを考える		0.530	0.016	0.281	有>無 +		
17	死を考えると時間の無駄	※	0.272	0.051	0.077	有>無 ***		
8	死は年取ったとき不安	※	-0.223	-0.470	0.270	無>有 +		
23	考え方が楽観的である	※	0.220	0.217	0.095	有>無 **	有>無 **	有>無 *
12	大切な人の死の不安		0.197	0.266	0.109	有>無 +		
10	死を気にしない	※	0.170	0.480	0.259	有>無 *		
25	死後の世界が不安		0.135	0.355	0.144			
13	死ぬことで生き方を変えない	※	0.118	0.200	0.054	有>無 +		
18	死は悲しいことでない	※	0.046	0.261	0.070			
24	死に直面しても動揺しない	※	0.039	0.233	0.056			
19	死後の世界があってほしい		0.032	0.190	0.037		無>有 *	
	因子寄与率		16.650	33.084				

(注) 使われた質問内容は付表1参照

*** p<.001, ** p<.01, * <.05,

表2 児童期までの動物との死別経験

動物の種類	頻度	百分率
ハムスター	38	42.7
イヌ	19	21.3
ネコ	5	5.6
キンギョ	6	6.7
ウサギ	4	4.5
トリ	8	9.0
カメ	3	3.4
リス	1	1.1
ヒヨコ	1	1.1
モルモット	2	2.2
メダカ	2	2.2
合計	89	100.0

ると、大きな差はないように思われる。

幼・児童期での身近な人との死別経験をもつものは40.8%で、可愛がっていた動物との死別経験をもつものは41.9%であった。Lagrand (1981) では、千人を超える大学生の調査では、29.8%が大切な人との死別経験を持っていた。

人や動物との死別経験と死を意識した経験との間に関連性があるか否かを、 χ^2 二乗検定によって調べたが認められなかった。青年期にいたるまでには、4分の3という多くのものが「死」を意識した経験があるため、死別経験との関係が認められなかったようである。前出の倉田では、臨終への立ち会い経験という一歩踏み込んだ死別経験との関連性を求めたこともあり、そこでは有意な差異が認められていた。

幼児期から大学生になるまで4つの学校段階に分け、どの段階で死を意識した経験があったかについては、高校時代が最も多く(44.5%)、小学校(36.1%)、中学校(28.3%)と続き、幼児期はわずかであった(5.2%)。学年が異なるので付随的に調べた大学生においては、大学生としての経験の長

さの差異から、1年生は19.1%であったのに対して、2年生は50.0%に達し有意差が確認された($\chi^2=19.18, df=1, p<.001$)。縦断的な確認が必要ではあるが、その後の1年間の間の何らかの共通の要因が急激な増加の背景にあるのかもしれない。

身近な人との死別体験者の対象(複数回答の全体)については、記述者49名、総記述数55例のうち親戚が約95%に達しており、なかでも祖父母が58.2%、曾祖父母が29.1%で全体の87.3%を占めた。その他は3例しかなく、各々友人、教師、隣人であった。しかしながら、未記述者が37.1%(29名)に達しており、記述しにくい理由があったのかもしれない。安藤ら(2003)では、18歳から24歳という本研究よりはやや年齢が高い調査対象ではあるが(20歳以下が74.5%)、そこでは実父母が5.4%であり、今回一名もいなかったとは想定しがたく、記述を避けた可能性がある。

身近な動物の死(以下、「動物との死別経験」)に関しては、80名(41.9%、総計103例)が体験していた。動物の種類未記載者が14名おり記載率は、82.5%であり、複数の記載を含めると89例あった。動物の種類と頻度割合の内訳は、表2の通りであった。ハムスターが圧倒的に多く、半数近くに上った。以下、イヌ、ネコ、キンギョ、ウサギと続いた。これには、当然ペットとしての飼育数と寿命が関連している。ハムスターは、イヌやネコに比べて寿命が短く(2, 3年といわれている)、死別経験は自ずと多くなる可能性がある。

3) 今回用いた「死に関する意識」の質問紙の因子分析

今回用いた田中(2001)の質問紙で調査対象としたのは、青年期、壮年期、老年期と幅広く、男性も含まれているため因子構造が異

なる可能性があるので、因子分析（SMC法、バリマックス回転）を試みた。因子負荷量を.4以上、共通性を.3以上に基準を置き2因子から6因子まで実施したところ、表3に示したように2因子で最適解を得た。もとの分析結果は青年期で5因子、壮年期で6因子になっており、因子数が少なくなっていた。因子構造は異なるようではあるが、因子負荷量の少ない項目が入っていたり、共通性も勘案していなかった。実際、因子には本結果と同様に第2因子までしか名称がつけられていなかった。

両者を比較すると、項目数は、第1因子は同じであり1項目だけが入れ替わった（Q4からQ21へ）、第2因子は、今回3項目減少し共通の6項目になった（入らなかった項目-Q10, Q18, Q23）。なお、結果として、11項目が除かれ、理由は因子負荷量が.4を下回った8項目、共通性が.3を下回った6項目であり、両基準が重複して除かれた項目が8項目であった。第1因子はもとの「死を考える」因子と共通性が高かったが、名称は「日常的な死の意識」因子とした。第2因子はこれももとの「死の不安・恐怖」と共通な部分が多かったが、「死に対する否定的感情」因子とした。

4) 「死」を意識した経験による検討

死を意識した経験をもつものの方が、両因

子および両因子の合計スコアとも高くなると予測できるため比較したところ、表3に示したように「日常的な死の意識」因子、「死に対する否定的感情」因子、合計スコアとも高くなっていた（因子1 - $t=3.38$, $df=189$, $p<.001$ ；因子2 - $t=2.54$, $df=189$, $p<.01$, 合計スコア - $t=3.91$, $df=189$, $p<.001$ ）。

また、項目ごとに死を意識した経験の有無が関係しているかを検討したところ、これも表3（付表1には詳細を掲載した）に示したように、72.0%という18項目で有意ないしは有意な傾向が示された。ただし、17項目は予測の方向での差異であったが、1項目のみ反対（有意な傾向）であった。この「Q8 私は人が年をとったとき、死について不安になると思う」は、将来は不安であるが今はそうではないという意味を含んでおり、逆転項目として設定されていた。

5) 死別経験による検討

死の普遍性、体の機能の停止、非可逆性といった死の特性は、児童期のうちに理解されるという先行研究（仲村, 1994など）にもとづき、各因子と合計スコアについて児童期までの身近な人やかわいがっていた動物との死別経験が、これらの意識と関係があるのではないかと予測し、それぞれについて検討した。まず、身近な人との死別経験をもつものの割合は、40.8%（78/191）であった。

表3 3つの観点からの経験の有無による各因子ごとの平均値と標準偏差

	死を意識した経験		身近な人の死別経験		可愛がっていた動物の死別経験	
因子1 - 「日常的な死の意識」の因子						
	有	無	有	無	有	無
平均値	20.5	17.6	19.5	20.0	20.6	19.2
標準偏差	5.17	5.52	5.54	5.33	4.85	5.73
因子2 - 「死に対する感情」の因子						
	有	無	有	無	有	無
平均値	14.1	12.3	13.5	13.8	14.1	13.3
標準偏差	4.30	3.83	4.44	4.13	4.65	3.92

身近な人との死別経験の有無を基に、各因子ごとと各質問項目ごとに比較したが、2つの因子および合計スコアに関しては差異はなかった。項目ごとの比較では、3項目で差異があらわれた。ただし、内2項目では予測とは反対の方向での差であった。糸島(2005)の大学生への調査では、死別経験と死生観の内「不死感・死後の世界」尺度と「人智を超えた生命」尺度で、死別経験者が高い傾向のあることを見いだされていた。一方、丹下(2004)は青年期を扱った研究で死別経験の死への態度に対して、影響を与えることはなかった。さらに、松田(1996)も死別経験の個人の死に対する態度に対して、児童期までと異なり青年期以降はメディアや思索などの他の要因が関与してくると述べている。

同様に可愛がっていた動物との死別経験を有するものは、41.9%(80/191)であった。因子ごとの分析の結果、「死を考える」因子では有意差($t=1.67$, $df=189$, $p<.05$)が、「死に対する否定的感情」因子では傾向($t=1.32$, $df=189$, $P<.10$)が現れ、死別経験を有するものの方が高くなっていった。さらに、合計スコアでも同じように有するものが高くなっていった($t=1.95$, $df=189$, $p<.05$)。質問項目ごとの比較では、6項目で有意差ないしは有意な傾向が現れた。これらの項目は、3項目が「死を考える」因子で、2項目が「死に対する否定的感情」であった。

このように身近な人との死別では死の意識にほとんど影響は認められず、動物との死別経験では認められたという結果については、以下の点に留意する必要がある。つまり、前者の経験者のうち具体的記述のあった49名(62.8%)中、約9割までが、祖父母(ないしは曾祖父母)であったが、今回の調査では、当時同居していたか否かについては質問項目に含めていなかったため、それ以上の分析が

できなかった。そのため、「身近な人」という定義が一定ではなかったことを考慮すると、結果は限定的理解に留める必要がある。また、人の死については、死別者との関係の未記入者が29例(死別経験総数の37.2%)あり、そこに死の記述を避けたものが存在することを推測させる。

ペットロスに関する研究によれば、可愛がっていた動物の死による影響は、身内の人の死に比べれば立ち直りは早いものの心理面のみならず身体面へも影響があるという(Moria, 2001; 朝比奈, 2002など)。例えば、Stallones(1994)によれば、1年以内の死別経験者の内32%が抑鬱傾向にあったという。

死別経験については、身近な人の死よりも可愛がっていた動物の方が死への意識を高める結果になっていた。一般的には、人の死の方が強い否定的な感情を引き起こすといわれているが(Rajaramら, 1993など)、愛着が強いほど悲哀の程度が高い(濱野, 2007)という報告にもあるように、動物には自らから積極的に関わっており、餌や排便などの清潔の維持など世話をしてやらなければ生きていけない場合も多くある。特に、幼児童期から青年期中期までについては、動物との死別経験の方が大きな影響があるようである。

6) 最後に

全体として、死の意識はこれまでの死について考えた経験が死についての意識の各項目に影響していることが現れた。死別経験については、身近な人より可愛がっていた動物との死別経験の方が、死への意識を駆り立てているようであった。

このような結果を考慮すると、昨今学校教育のなかで「いのちの教育」の必要性が提唱されている現在(近藤, 2007; 兵庫・生と死を考える会, 2007など)、動物の飼育経験や死別経験をを用いた学校教育の意義を支持する

結果になった。木村（2009）は、ペットロスにともなう悲嘆反応についての研究の中で、「死の準備教育」へつながる可能性を指摘しており、小中学校での学校教育のなかでの効果的に取り扱うことが期待される。実際、デーケン（2001）は、愛知県の中学校での実践例をあげ、そこで示されているショックの少なさ、飼育経験者の多さ、経験談の幅が広いなど、人に比べて取り上げやすいメリットをあげている。

【要 約】

本研究は女子大学生を対象に25項目からなる「死に関する意識」についての質問紙調査を行い、これまでの死への意識経験、身近な人や動物との死別経験との関係を検討した。

利用した質問項目の対象が異なるため、因子分析の結果、今回は2つの因子が見いだされた。第1因子は8項目からなる「日常的な死の意識」因子で、第2因子は6項目からなる「死に対する否定的感情」であった。

項目ごとおよび因子ごとと両因子の得点に関して、死について考えた経験、身近な人との死別経験、可愛がっていた動物との死別経験の有無による差異を検討したところ、死への意識や経験が正の方向に関連する可能性があるという仮説の方向での有意な差異が示された。ただし、身近な人との死別経験はほとんど影響がなかった。因子ごとと合計スコアの比較では、死について考えた経験と動物との死別経験では、両因子、合計スコアとも経験のあるものの方が、有意に得点が高かった。項目ごとでは、順に17項目（全体での有意な差異-18項目）、2項目（同-3項目）、6項目（同-6項目）であった。

引用文献

- 安藤清志・松井 豊・福岡欽治 2003 近親者との死別による心理的反応-予備的検討 東洋大学 社会学部紀要 41,2,63-83.
- 朝比奈千絵 青少年期における飼育動物の喪失（ペットロス）体験に関する探索的研究 教育臨床心理 学研究 5,181-194.
- デーケン, アルフォンス 2001 生と死の教育 岩波書店
- 濱野佐代子 2008 幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究 発達 科学研究教育センター 22, 23-36.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁 2001 死別経験による遺族の人間の成長 死の臨床 24, 1, 69-74.
- 糸島陽子 2005 死生観形成に関する調査-看護学生と大学生の比較- 京都市立看護短期大学 30,141-147.
- Luiz Adrian, J. A., Deliramich, A.N., & Frueh, B. 2009 Complicated grief and posttraumatic stress disorder in humans' response to the death of pets/ animals. Bulletin of the Menninger Clinic, 73, 3, 176-187.
- 木村拓哉 2009 ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方 Japanese Journal of Psychosomatic Medicine, 49,357-362.
- 木村祐哉 2009 ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方 ヒトと動物の関係学会誌 49,357-362
- 近藤 卓（編著）2007 いのちの教育の理論と実践 金子書房
- Kuber-Ross, Elisabeth 1970 On death and dying, New York: Macmillan. 鈴木 昌（訳）1998 死ぬ瞬間-死とその過程について 読売新聞社
- 倉田真由美 2008 女子大学生の死に対する態度と関連因子の検討 立命館大学人間科学研究 16, 95-104
- Lagrand, L.E. 1981 Loss reactions of college students: A descriptive analysis, Death Education, 5, 235-248.
- 松田信樹 1996 青年の死の不安を規定する要因についての検討 人間科学研究（神戸大学発達科学部研究センター, 4, 57-65.
- Moir, A.A. 2001 Coping with sorrow on the loss of your pet, 2nd ed. 小杉正太郎（翻訳）、広川智子

- (翻訳), 2001 ペットロス of the psychology of media
カルサイエンス社
- 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学
研究 5,61-71.
- Rajaram, Shireen S.; Garrity, Thomas F.; Stallones,
Lorann; Marx, & Martin B. 1993 Bereavement
loss of a pet and Loss of a Human. *Anthrozoos*
6,8-16.
- 坂口幸弘 2002 死別後の心理的プロセスにおけ
る意味の役割: 有益性発見に関する検討 心
理学研究 73,275-280.
- 佐藤志穂子 1998 死別者による PTSD: 交通
事故遺族 34 人の追跡調査 臨床精神医学
27,1575-1586.
- Stallones L. 1994 Pet loss and mental- health.
Anthrozoos 7,172-187,
- 丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に
対する態度の変化 発達心理学研究 15,1,65-
76.
- 田中愛子・後藤政幸・岩本 晋・李 恵英・杉
洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳
原達也 2001 青年期および壮年期の「死に
関する意識」の比較研究 山口医学 50, 4,
697-704.
- 渡邊照美・岡本祐子 2005 死別経験による人格
的発達とケア体験との関連 発達心理学研究
16,3,247-256
- Worden, J.W. 1991 *Grief counseling and grief therapy*,
2nd Ed., Spring Publishing Company. 鳴澤 實
(監訳) 1993 グリーフカウンセリング 川
島書店

付表 各項目の平均値と標準偏差および死に関する3つの経験による平均値と検定結果

質問順	質問項目内容	全体		死を意識		人との死別経験		動物との死別経験	
		平均値	標準偏差	有意差	有り	有意差	有り	有意差	有り
1	私は自分自身の死について考えることがある。	2.81	0.93	2.96	p<0.01	2.96	2.96	2.88	2.89
2	私は若死について考えることがある	2.36	1.01	4.00	p<0.001	2.52	2.36	2.36	2.46
3	私は寝る前に死について考えることがある	1.93	0.94	1.88	p<0.05	2.00	1.89	1.96	2.08
4	私は死ぬ時期がわかったら、それまでの時間をどのように振舞うか考えることがある	2.64	0.97	1.50	p<0.10	2.70	2.55	2.70	2.69
5	私が死んだとき、身内の人がどう振舞うか、どう感じるかを考えることがある	2.74	0.91	0.99	n.s.	2.78	2.73	2.74	2.88
6	私は病気のとき、死について考えることがある	2.10	0.98	0.82	n.s.	2.13	2.10	2.00	2.14
7	私は自分の死について空想することがある	2.30	0.98	2.12	p<0.05	2.39	2.23	2.35	2.41
8	私は人が年をとったとき、死について不安になると思う ※	2.14	0.92	1.49	p<0.10	2.08	2.23	2.08	2.08
9	私は周囲の人々以上に、死についての不安が大きいの ※	1.92	0.92	2.61	p<0.01	2.02	1.87	1.96	2.05
10	私は死ぬことはほとんど気にしない ※	2.83	0.94	1.72	p<0.05	2.90	2.77	2.87	2.90
11	私は自分が死ぬと考えると不安になる	2.73	0.95	1.75	p<0.05	2.80	2.68	2.76	2.78
12	私にとっって大切な人の死を考えると不安になる	3.71	0.55	1.58	p<0.10	3.75	3.69	3.73	3.76
13	私は将来必ず死ぬと思っても、自分の生き方を変えようとは思わない ※	2.05	0.79	1.54	p<0.01	2.10	2.03	2.06	2.05
14	私は自分の死を、悪夢のような苦しみと思っ ている	1.82	0.84	1.85	p<0.05	1.88	1.82	1.81	1.90
15	私は死ぬことが恐ろしい	2.75	0.97	1.24	n.s.	2.80	2.76	2.75	2.88
16	私は人生が短いことを考えると、気持ちが悪 挿してくる	2.19	0.93	2.38	p<0.001	2.28	2.18	2.20	2.29
17	私は死について考えることが、時間の無駄だ と思う ※	3.01	0.76	3.18	p<0.001	3.11	3.04	2.98	3.96
18	私は豊かな人生を過ごせたら、死ぬことはそ う悲しいことではないと思う ※	2.09	0.89	0.47	n.s.	2.11	2.04	2.13	2.06
19	私は死後の世界があってもいいと思う	3.01	0.91	0.50	n.s.	2.99	2.83	3.12	3.01
20	私は自分が死ぬと考えると憂鬱になる	2.24	0.94	2.08	p<0.05	2.32	2.15	2.30	2.24
21	私は大切な人の死について考えることがある	2.99	0.89	2.75	p<0.01	3.09	2.82	3.11	3.10
22	私は交通事故で死ぬかもしれないと考えるこ とがある	2.57	1.01	2.36	p<0.01	2.66	2.64	2.51	2.60
23	私の考え方は、楽観的である ※	2.29	0.86	2.74	p<0.01	2.39	2.47	2.16	2.44
24	多くの人が葬式など、人の死に直面すると不 安になるが、私は動揺しない ※	3.30	0.73	1.05	n.s.	3.34	3.30	3.31	3.29
25	死後の世界があるかどうか、私は心配である	1.99	0.83	0.75	n.s.	2.02	1.99	2.00	1.98

※ 逆転項目